

幼稚園教育と小学校教育の関連について

福田 啓子・武石 仁美

(昭和58年9月30日受理)

Educational Effect of the kindergarten on the Elementary School

Keiko FUKUDA and Hitomi TAKEISHI

(Received September 30, 1983)

I はじめに

本来、幼稚園教育と小学校教育はその一貫性が重視されなければならない。5才児から6才児、すなわち幼児期から児童期への子どもの成長発達は連続して行なわれるものであり、その教育機関としての幼稚園と小学校の間に断層があってはならないのである。しかしながら、両機関は制度的には一貫したものとなっているが、実践にあたってはまだ充分とはいえず教育上の配慮が必要とされる。われわれは今までに幼稚園や小学校の研究会や勉強会に参加し、幼稚園教育から小学校教育への移行が子どもの生活に障害を与えることなくスムーズに行なわれるための指導内容や方法、幼小一貫教育についての問題点などを主として各教師のそれぞれの立場からの意見を中心に検討してきた。そして、その結果幼稚園教師の小学校教師への期待と現実の小学校教育のズレ、および小学校教師の幼稚園教師への期待と現実の幼稚園教育の間に大きなズレがあることが推察され、それらの所在を明確にすることが早急に必要であるという考えに至った。そこで、本研究においては、まず幼稚園教育と小学校教育の関連性を明確に把握し、社会の変化に対応できる教育制度について検討すると同時に、現在の教育制度の現状を調査し、さらに問題点について研究することを目的とする。

II 現行制度における幼小の関連

ここでは、幼稚園教育の変遷から、その目的と目標を明確にし、小学校教育との相連、関連性について検討する。また、設置状況や教育条件についても検討していく。
児童学科研究室

1. 幼児教育の変遷

幼稚園は、1876年(明治9年)、「幼稚園開設ノ主旨ハ年齢未滿ノ小兒ヲシテ、天賦ノ知覚ヲ開達シ、固有ノ心思ヲ啓發シ、身体ノ健全ヲ滋補シ、交際ノ情誼ヲ曉知シ、善良ノ言行ヲ慣熟セシムルニ在リ」¹⁾という園則のもとに、東京女子師範学校附属幼稚園として創立された。保育内容は、フレーベル恩物を中心とした唱歌、遊戯、説話、計数、博物理解、体擦などであったが、1881年(明治14年)には、体育科目が改正され、会集、修身の話席物の話、教え方、読み方、書き方、遊戯、唱歌となった。これらの内容をみる限り、この時期の幼稚園教育は“すべて保母の方からの働きかけであり、教えるということに重きが置かれ、当時の学校的性格を強くおびたものであった²⁾”というここがいえる。1869年(明治32年)には、幼稚園保育及設備規定が公布され、「幼稚園ハ滿三年ヨリ小学校ニ就学スルマデノ小兒ヲ保育スル所トス」³⁾と目的が示され「幼児教育ノ頁目ハ、遊戯、唱歌、談話及手技トス」となっている。この時期は幼稚園の増加、特に私立幼稚園が目立ち、その教育方法も以前の教えるという形から幼児の生活を考えていくという形になっていくのである。1926年(大正15年)には、「幼稚園」が公布され、「幼稚園ハ保育シテ其心身ヲ健全ニ發達セシメ善良ナル性情ヲ涵養シ家庭教育ヲ補フヲ以テ目的トス」⁴⁾と目的が示された。また、父母ともに労働に従事し、家庭教育が困難な者の子どもは3才未滿でも入園できるようになったことが特徴である。すなわち、“幼稚園をより社会と結びつかせ、社会の要求に応える機関として発達させていくことを意図したものである⁵⁾”。保育内容は、遊戯、唱歌、談話、手技に観察が加えられている。そして、1947年(昭和22年)、学校教育法の公布により

小学校と同じ学校教育機関として位置づけられ、その目的は「…幼児に適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する…」⁷⁾と定められた。教育目標は「①健康、安全で幸福な生活のためのために必要な日常の習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図ること、②園内において集団生活を経験させ、喜んでこれに参加する態度と協同、自主性および自律の精神の芽生えを養うこと、③身の周りの社会生活および事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと、④言語の使い方を正しく導き童話、絵本等に対する興味を養うこと、⑤音楽、遊戯、絵画、その他の方法により、創作的表現に対する興味を養うこと」⁸⁾となり、これらの内容は、従来の幼稚園が新しい幼児教育のあり方を考えていく場となったことを意味する。1956年（昭和31年）には、幼稚園教育要領が発行され、小学校教育と制度上一貫性をもつものとなった。

一方、小学校は、1872年（明治5年）「学制」により初等教育機関として発足以来今日に至っている。そして幼稚園と同じ1947年、学校教育法によりその目的は「小学校は心身の発達に依りて、初等智通教育を施すことを目的とする」⁹⁾とされ、目標は「①学校内外の社会生活の経験に基き、人間相互の関係について正しい理解と協同、自主および自律の精神を養うこと、②郷土および国家の現状と伝統について正しい理解に導き、進んで国際協調の精神を養うこと、③日常生活に必要な衣食、産業等について、基礎的な理解と技能を養うこと、④日常生活に必要な国語を正しく理解し、使用する能力を養うこと、⑤日常生活に必要な数量的な関係を正しく理解し、処理する能力を養うこと、⑥日常生活における自然現象を科学的に観察し、処理する能力を養うこと、⑦健康、安全で幸福な生活のために必要な習慣を養い、心身の調和的発達を図ること、⑧生活を明るく豊かにする音楽、美術、芸術等について基礎的な理解と技能を養うこと」¹⁰⁾とある。また、同年、「学習指導要領一般編」が発行されるが、その後現在までに5回の改訂をくり返し、教科書制度などとあわせ、戦後の児童教育のあり方はさまざまな変遷がみられるのである。

さて、現在幼児教育の集団施設としては、幼稚園の他に厚生省所管の保育所がある。この機関は、「日日保護者の委託を受けて、保育に欠ける乳児又は幼児を保育する」¹¹⁾という目的で児童福祉施設として存在するものであり、保育時間や日数、入所条件なども幼稚園とは異なる。しかし、近年急速に増加普及し、1980年（昭和55年）

の小学校第一学年児童数に対する幼稚園と保育所の終了者は、それぞれ64.4%、40.2%を占めている。したがって、少なくとも小学校へ入学するという同じ目的をもった子どもたちの教育の場として、幼稚園と保育所の2つの機関を考えていくのが妥当であろう。ちなみに両機関の関係については「保育所の3、4、5才児に対する教育機能は、幼稚園教育要領に対応することが望ましい」¹²⁾とされている。

2. 幼小の設置状況

小学校との関連を考えていく場合、小学校通学区域内での保育所と幼稚園の設置状況を検討していく必要があるだろう。それぞれの設置数を市町村別にみると40.4%、64.5%¹³⁾となるが、各地域によってその割合は異なる。沖縄県では、5才児の幼稚園就園率94.5%、保育所在籍率2.3%であるのに対し、高知県では、19.1%、68.7%となっている。これらの地域から生じる教育条件の差は、小学校入学時の指導においても大いに影響を与えるものだろう。また、公立がほとんどを占める小学校に対し、幼稚園は6割が私立である。この私立独自の教育方針などから、教師や園児の数、施設や設備などが異なる。公立小学校と幼稚園の間では、併設園が設置されている所もあり、情報交換の場、合同行事、施設や設備の共有などから関連が図られているが、公立でも独立幼稚園や私立幼稚園と小学校間では不十分である。表1は、東京都23区内の公私立幼稚園と小学校の設置状況を学校名簿からあげたものである¹⁴⁾。これらをみると、公立小学校全てに併設園が設置されている区（千代田区、中央区）、公立小学校に対して、公私立幼稚園どちらも多い区（港区、新宿区）、公立幼稚園はあるが併設園は少ない区（荒

表1 東京都における公私立幼稚園と小学校
(昭和57年度)

区	幼小			幼小		
	私	公	併	私	公	併
千代田	6	14	14	3	14	14
中央	1	19	19	0	19	19
港	27	24	23	2	26	26
新宿	19	36	35	1	36	36
文京	23	14	7	1	21	21
台東	17	27	25	0	28	28
渋谷	23	12	12	3	22	22
荒川	7	10	0	0	27	27
足立	65	5	0	0	27	27
江戸川	42	6	2	0	65	65
墨田	15	8	9	0	31	31
江東	12	31	11	18	0	48
品川	30	9	0	2	37	37
目黒	32	4	0	2	22	22
大田	56	17	0	2	61	61
世田谷	77	11	0	7	65	65
中野	37	4	0	1	29	29
杉並	54	7	7	4	43	43
豊島	28	3	0	2	29	29
北	0	10	0	2	46	46
板橋	40	2	0	1	56	56
練馬	5	1	0	1	61	61
葛飾	0	5	0	0	54	54

川区、大田区、北区)、ほとんどが私立幼稚園である区(足立区、世田谷区)など区によってのばらつきがめだつ。中でも、公立小学校に対して公立と私立の幼稚園数が10分の1にも満たない区(練馬区、葛飾区)などは保育所との関わりも検討しなければならない。子どもの発達には環境に影響され、このような物質的な環境の変化を少なくするための教育条件が整えられていかなくてはならない。

III 現行制度における幼小の現状と問題

ここでは、先に述べた主旨のもとに幼小関連について具体的な資料をあげ、その現状と問題点を検討する。

1. 方法

A. 調査内容

- ・幼小間の連絡会や研究会等の実施状況と教師の意識
- ・幼小教育の一貫性についての考え方と問題点
- ・幼稚園教育への期待と不安
- ・小学校教育への期待と不安

B. 調査対象

東京近郊の公私立幼稚園と小学校に在職する当大学の卒業生およびその園や学校の先生方各100名。

C. 調査期間

第一回目は、S58年2月～3月、第二回目は、S58年4月～5月。これらの期間を選んだのは、幼稚園側は園児を卒園させ、小学校側は新1年生を受け入れる時期であり、各先生方はお互いへの期待と不安が最も集中されると思われたからである。

D. 実施方法

質問用紙を作成し、主に郵送により行なうが、この調査の内容とわれわれの意図をより充分に理解してもらうために面接の方法もとった。

2. 結果

① 連絡会、研究会

幼稚園と小学校の連携について考えていく場合、両機関に勤務する教師間での連絡会や研究会がどの程度行なわれているかは重要なポイントとなる。表2は、在職している地域内での実施状況を調査した結果である。これらを見ると、連絡会では、小学校50校のうち、ある(20校)、ない(30校)、幼稚園50園のうちある(11園)、ない(39園)、研究会は、小学校、ある(2校)、ない(48

表2 幼小間の連絡、研究会

内容 種別	連絡会		研究会	
	ある	ない	ある	ない
幼	11	39	20	30
小	0	50	2	48

校)、幼稚園、ある(0園)、ない(50園)となり必ずしも徹底されていないことがわかる。特に連絡会があると答えた幼稚園は全て公立であったことに注目される。もう少しその内容についてみると、各幼稚園や小学校では自分たちの教育領域に関する研究会や研修などが平均1月回以上行なわれているのに対して、両者含めた会は年に1～2回と少なく、その内容も形式的に終わっているとの声が多く聞かれた。地域によっては、幼稚園から送られてくる「指導書要録抄本」¹⁵⁾で初めて小学校側は幼稚園やその子どもの様子を知るといった状態もみられる。では、このような現状を各教師はどのようにとらえているのであろうか。表3は、幼小の連絡会や研究会の必要性についての回答である。

表3 幼小の連絡会・研究会の必要性

	報告、連絡は今後、どの程度必要だと思いますか、					無回答
	非常に必要	やや必要	どちらでもない	あまり必要ない	全く必要ない	
小学校	25	32	10	11	0	13
幼稚園	41	44	0	0	0	10
	研究会は今後、どの程度必要だと思いますか、					無回答
	非常に必要	やや必要	どちらでもない	あまり必要ない	全く必要ない	
小学校	21	26	22	9	0	11
幼稚園	32	38	11	7	0	8

が、連絡会では必要性を感じているのは幼稚園側の方がやや多く、小学校側ではどちらともいえない(10人)、あまり必要でない(11人)と消極的である。研究会について

も、幼稚園側の方が必要性を感じている人数が多いが、どちらともいえない(11人)、あまり必要でない(7人)となる。これらの結果は、幼稚園あるいは小学校内の問題だけで精一杯であり相手側には目が向けられない、自分たちの業務の忙しさ(教材づくり、その他雑務)から時間が無いとの理由があげられた。幼小連携において、時間的な問題が新たに検討されねばならないであろう。

② 幼稚園教育への期待と不安

ここでは、小学校側の教師に対して、主に入学当初の子どもの様子などから、幼稚園終了までにどのような指導をしてほしいかということや、指導してほしいことなどをできるだけ具体的に述べてもらった。その中から特に多かった要望や問題とされる内容についてみると、「食事の仕方やトイレの使用ができるように」「手洗いや手ふきが自分のできるように」などの基本的習慣に関する内容、「用具の整理や整頓ができるように」といった様子に関する内容、「自分の名前を呼ばれたらきちんと返事ができるように」「自分の要求を口に出して言えるように」といった内容、「友だちと仲よく遊べるように」「集団生活ができるように」といった社会性に関する内容、さらに「素直さをもった子になるよう

に「思いやりのある子に」「豊かな情操教育を」といった情操面に関する要望が上位を占めた。また、教科面では、「ひらがなが読めるようにしてほしい」「自分の名前が書けるようにしてほしい」「クレヨンや鉛筆が持てるように」「体力や運動能力についての指導をしてほしい」「物を造ることができるように」といった幅広い要望があげられた。そして指導してほしい内容では、「文字や数字についてある程度は望むが、まちがった筆順、教え方をしている子どもがいて困る」あるいは歌唱、飼育栽培、絵画製作などの先取に関しての不満があげられた。そこで、実際に受け持っている子どもたちがどの程度できるのか、そして、そのことについて就学前教育に問題があると思われるか、幼稚園教育ではどの程度の指導を望むのかということの評定したのが表4である。これらを見ると、1～15までの項目、すなわち生活の基本的なことは、半数以上の子どもができると答えたのが大部分を占め、特に問題はないように思えるが、就学前教育にやや問題があるというのが半数以上になり、幼稚園側へは、やや望むが大多数である。16～29の技術面に対することでは、幼稚園側にやや望むとあまり望まないがほぼ同じ比率である。

③ 小学校教育への期待と不安

ここでは、幼稚園側に対して特に小学校低学年を担当する教師が、入学当初の子どもたちにどのような指導をしてほしいか。また、指導してほしいことはどのようなことかをできるだけ具体的に述べてもらった。その内容は、「子どもの個性を尊重してほしい」「子どもの成長段階に即した指導をしてほしい」という2点に集中された。すなわち「教師が子どものひとりひとりへの問いかけを多くし、その子の個性を大事に伸ばしてほしい」「子どもが何を考えているのか、なぜそのような行動をしたのか、結果だけで判断せずにその原因を追求してほしい」「自主性を高めるように、全体の(クラス)の中でひとりの子が埋れてしまうことのないように指導してほしい」「落ちこぼれないように、そして自信をなくすことがないように目をかけてほしい」ということであった。これは、小学校ではどうしてもクラス単位の生活になり、集団の中で子どもの伸びようとする芽がつまれてしまうのではないかという不安からくるのだろう。また、遊びということについて「教師がもっと子どもと遊んでほしい」「遊びの中から学習へと導いてほしい」「友達同志のつながりが深められるようにしてほしい」な

どの声も聞かれた。表5は、小学校との比較が可能なように項目を整理し、幼稚園で実際に受け持っている子どもたちに対してどの程度重視しているのか、小学校側に対してはどの程度の指導を望むのか、家庭においてはどの程度指導を望むのかということの評定したものである。②では、基本的な生活に関する内容を小学校側から幼稚園へ望む声が多くみられたが、幼稚園側ではこれらの指導をやや重視、ふつうとされている。そして小学校側へやや望むとされ、家庭に対しては非常に望む声が多かった。1のあいさつや返事、8物を大切にする、15人の話が聞ける。といった事項は、家庭にも小学校にも強く望まれている。特に、15は小学校側においても幼稚園にその指導を望む声と比較的多くみられる。これらのことは、本来家庭内での教育や躾が小学校にまでおよび、小学校側はその指導を幼稚園側に望み、幼稚園側もまた小学校へ望むという現状がみられるのである。

②、③では、それぞれの教師が望むことを実際の指導ではどう扱われているのかということのみてきたが、質問内容が漠然としていたため回答側にわれわれの意図することが十分に伝わらなかったこと、データ数が少なかつたことなどその結果は明確ではない。しかし両教師の声にわずかながらも両教育間のズレがみられる。そしてこのズレがどのように、どのようなことから生じているのかより調査を広げ原因を追求していくことが必要であるろう。

Ⅳ 考 察

幼稚園教育と小学校教育を図るためには、現在の教育制度においてその教育のあり方がどのようになされなければならないか。また、実際の現場での指導が幼稚園教育要領、小学校学習指導要領の内容にどう対応していかなくてはならないかという問題が生じてくる。そこでこの問題点および対応策について次のようなことが考えられる。

1. 指導内容の関連

図1.2は、幼稚園と小学校の指導内容を示したものであるが、これを見ると経験や活動を中心とした六領域(健康、自然、社会、言語、音楽リズム、絵画製作)での総合指導に対して、道徳、特別活動、各教科(国語、算数、社会、理科、音楽、図画工作、家庭、体育)の教科別学習体系に沿った指導と、その指導内容は異なる。幼稚園は小学校の準備教育の場ではないとよく言われることで

幼稚園教育と小学校教育の問題について

表4 1. 小学校アンケート結果

(89人)

質 問 内 容	あなたの受けもっている子どもたちはどの程度できますか。					問1の回答について就学前教育に問題があると思われませんか。						幼稚園(保育園)において、どの程度の指導を望まれますか。					
	ほとんどの子どもができる	半数以上ができる	半数の子どもができる	半数以下ができない	ほとんどできない	非常に問題がある	やや問題がある	どちらともいえない	あまり問題はない	全く問題はない	わからない	非常に望む	やや望む	あまり望まない	全く望まない	かえって害になる	わからない
1. あいさつや返事	45	24	16	4	0	29	17	6	18	16	0	44	40	2	0	0	0
2. 整理・整頓	9	37	43	0	0	22	30	20	11	2	0	32	51	4	0	0	0
3. 規則を守る	11	56	22	0	0	6	44	13	20	2	0	40	42	4	0	0	0
4. 時間を守る	15	49	14	11	0	4	31	31	16	4	0	16	58	13	0	0	0
5. 行儀がよい	2	37	38	12	0	13	40	13	16	4	0	16	53	18	0	0	0
6. 仲よく遊ぶ	27	48	9	5	0	8	28	23	18	8	0	38	40	8	0	0	0
7. 集団生活	28	52	9	0	0	16	40	9	13	8	0	38	47	2	2	0	0
8. 物を大切に使う	7	32	32	18	0	29	40	4	11	1	0	47	62	2	0	0	0
9. トイレの使用	51	24	11	2	0	16	29	4	28	8	0	33	42	4	2	0	4
10. 手洗い、手ふき	40	34	11	4	0	16	33	2	24	10	0	29	55	0	2	0	0
11. うがいをする	31	27	18	11	1	9	27	22	23	7	0	20	60	4	2	0	0
12. 衣服を清潔にする	13	33	40	3	0	2	31	31	18	5	0	13	48	20	0	0	1
13. 偏食しない	16	31	33	9	0	24	33	13	8	5	0	24	48	11	0	0	1
14. 話が終りまで言える	5	32	42	10	0	11	42	8	21	4	0	13	62	11	0	0	0
15. 人の話が聞ける	12	27	31	17	2	20	37	16	11	4	0	54	34	0	0	0	0
16. 自分の名前が書ける	82	0	2	5	0	2	13	16	47	8	0	9	38	36	2	0	1
17. ひらがなが書ける	53	27	4	4	0	4	9	23	42	5	0	16	56	4	7	1	0
18. ひらがなが読める	67	13	4	4	0	4	6	29	36	11	0	7	24	49	6	0	0
19. 数字が書ける	60	20	4	4	0	7	9	27	38	7	0	0	18	53	13	2	0
20. 数がかぞえられる	55	18	11	4	0	2	13	27	38	7	0	0	27	47	13	0	0
21. 簡単な計算ができる	29	18	33	7	0	2	18	22	33	9	0	0	9	37	31	7	0
22. 鉛筆やクレヨンが正しく持てる	22	33	31	2	0	10	42	16	14	4	0	24	44	11	4	0	0
23. ハサミが使える	36	28	22	2	0	6	29	11	31	8	0	22	55	11	0	0	0
24. 紙が折れる	18	44	26	0	0	2	33	27	31	4	0	16	42	31	0	0	0
25. 絵が描ける	24	24	28	11	0	2	15	26	33	8	0	7	36	38	4	2	0
26. リズムがとれる	13	40	31	2	0	2	20	29	31	4	0	16	33	36	2	0	0
27. 歌が唱える	47	35	7	0	0	2	22	24	24	14	0	20	44	16	0	0	0
28. 楽器ができる	18	29	31	7	6	7	18	18	36	7	0	4	29	40	11	2	0
29. 走・跳ができる	42	29	17	0	0	2	36	18	18	13	0	6	47	29	2	0	1
30. 健康に気をつける	14	34	29	10	0	8	29	18	22	4	0	13	60	7	2	0	0
31. 動、植物の世話ができる	20	33	26	9	0	8	27	22	22	7	0	16	44	26	0	0	0
32. 動、植物をかわいがる	21	42	26	0	0	12	29	13	27	7	0	31	44	11	0	0	0
33. 安全に気をつける	11	33	31	11	2	16	29	24	8	8	0	44	38	4	0	0	0
34. その他	1	0	1	0	0	0	4	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0

表5 2. 幼稚園アンケート結果

(96人)

質 問	あなたの幼稚園では、どの程度重視されていますか。					小学校において、どの程度の指導を望まれますか。					家庭において、どの程度の教育が望まれますか。						
	非常に重視している	やや重視している	ふつう	あまり重視していない	全く重視していない	非常に望む	やや望む	あまり望まない	全く望まない	かえって害になる	わからない	非常に望む	やや望む	あまり望まない	全く望まない	かえって害になる	わからない
1. あいさつや返事	45	41	10	0	0	53	38	5	0	0	0	73	23	0	0	0	0
2. 整理・整頓	22	39	35	0	0	32	48	16	0	0	0	47	49	0	0	0	0
3. 規則を守る	35	33	28	0	0	51	42	3	0	0	0	37	46	10	0	0	0
4. 時間を守る	16	27	39	10	1	45	48	2	0	0	1	49	39	2	0	0	1
5. 行儀がよい	12	27	51	6	0	16	56	20	0	0	0	42	45	6	0	0	0
6. 仲よく遊ぶ	33	41	22	0	0	52	39	4	0	0	0	33	47	8	0	0	2
7. 集団生活	31	33	29	2	0	49	41	3	0	0	0	18	31	29	4	0	5
8. 物を大切に	31	37	31	0	0	61	35	0	0	0	0	74	18	0	0	0	0
9. トイレの使用	20	24	53	0	0	25	45	24	0	0	1	51	39	2	0	0	0
10. 手洗い、手ふき	20	39	35	1	0	23	47	22	0	0	0	53	36	2	0	0	0
11. うがいをする	19	35	40	2	1	19	49	27	0	0	0	51	35	6	0	0	0
12. 衣服を清潔にする	18	28	47	2	0	25	41	25	0	0	0	63	26	2	0	0	0
13. 偏食しない	12	31	52	0	0	21	57	16	0	0	0	56	37	0	0	0	0
14. 話が終りまで言える	29	37	29	0	0	60	28	2	0	0	0	45	45	2	0	0	0
15. 人の話が聞ける	59	28	9	0	0	80	12	2	0	0	0	75	17	0	0	0	0
16. 自分の名前が書ける	10	28	29	22	7	61	29	0	0	0	0	11	50	25	3	0	0
17. ひらがなが書ける	2	22	22	32	18	56	26	1	0	0	0	5	32	43	4	0	0
18. ひらがなが読める	6	2	12	16	17	37	10	4	0	0	0	12	41	35	2	0	0
19. 数字が書ける	0	13	25	34	23	72	16	3	0	0	0	8	29	47	4	0	0
20. 数がかぞえられる	8	31	39	14	3	70	18	2	0	0	0	9	45	33	2	0	0
21. 簡単な計算ができる	0	9	26	28	35	41	26	14	2	0	1	4	29	49	6	0	1
22. 鉛筆やクレヨンが正しく持てる	27	29	33	6	0	39	26	19	0	0	1	29	43	18	0	0	0
23. ハサミが使える	31	43	19	2	0	37	31	13	2	0	0	22	49	22	0	0	0
24. 紙が折れる	10	45	39	2	0	33	41	16	0	0	1	11	45	34	0	0	0
25. 絵が描ける	8	24	41	18	5	31	43	12	0	0	2	1	29	45	8	2	0
26. リズムがとれる	12	47	31	6	0	25	53	16	0	0	0	2	34	51	4	0	0
27. 歌が唱える	19	37	35	2	0	32	41	6	0	0	2	10	47	31	2	0	0
28. 楽器ができる	12	25	54	4	0	29	53	2	0	0	2	4	37	43	6	0	0
29. 走・跳ができる	23	32	33	0	2	47	39	8	0	0	1	20	33	35	2	0	0
30. 健康に気をつける	47	26	21	0	0	54	27	4	0	0	0	74	11	4	0	0	0
31. 動、植物の世話ができる	14	53	25	2	0	39	47	2	0	0	0	31	45	11	2	0	0
32. 動、植物をかわいがる	43	35	17	0	0	52	35	2	0	0	0	45	35	9	0	0	0
33. 安全に気をつける	53	31	9	0	0	66	20	0	0	0	0	49	19	2	0	0	0
34. その他	1	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0

あるが、現実には小学校との間に奇妙な関係がみられる。すなわち小学校側では国語や算数に関する文字や数字の指導を幼稚園側に望み、学習指導要領に示された目標や指導内容より高度なレベルでその指導が発せられる。幼稚園側においても小学校に入学して困らないようにと必要以上に指導がなされる。しかし、生活に関することでは、幼稚園ですでに身につけているものとみなされひとりひとりに注意が払われぬ反面、1年生として自覚をもって入学してくる子どもたちに幼稚園以上に世話をやったりする場面に時としてはぶつかるとのである。このような教師の極端な指導の変化は子どもたちの生活や学習に混乱を与え、その成長発達を阻害し、無気力や無感動にさせてしまう。幸いなことに新学習指導要領では幼小間の段差をなくすために低学年での合科指導の推進をあげている。そして、ここには教科のみ総合して取り扱うのではなく、子どもたちの主体性、創造力、感覚や能力の育成などを含めて指導されることを目的としていることはいうまでもない。それでは、何が原因となって幼小間の教師に期待と現実によるズレが生じるのだろうか。たとえば、「自分の要求がゆるい」ということは、幼稚園では「自分の気持ちや考えをことばで表わそうとするように導くこと」¹⁵⁾あるいは「人にわかることばを使うようにする意欲を育てる」¹⁶⁾と記され、小学校では「自分のことばをはっきり述べること」¹⁷⁾となっている。すなわち、幼稚園ではその子の目標達成への過程が重視されているのに対し、小学校では目標を達成したかどうかで評定されるところに原因が考えられる。また、小学校では各領域ごとにねらいが示されているが、幼稚園では具体的なねらいや指導内容、方法、範囲などは各園にまかされ、その基準が明確でないことも原因のひとつであるだろう。したがって幼稚園においては、小学校の指導内容に対して、何をどこまで、どの程度指導していくべきかの目安を定めることが必要とされ、小学校においても幼稚園との関連内容をより把握し、その指導方法も考えていかなければならないだろう。

2. 指導方法の関連
幼稚園と小学校の各

教師は、指導内容に沿った子どもの成長段階に即した指導方法が要求される。それぞれの違いとむずかしさを当大学における学生の過去5年間(S.53~57年度)の幼稚園実習報告書から上位10項目をあげてみると、①子どもへのことば使いのむずかしさ、②子どもへの働きかけのむずかしさ、③子どもの実態をつかむことのむずかしさ、④子どもの個性を尊重し、全体のバランスを考えるむずかしさ、⑤教材づくりのむずかしさ、⑥遊びの大切さとむずかしさ、⑦園差による指導のむずかしさ、⑧生活指導のむずかしさ、⑨家庭環境や母親の問題、⑩教師の態度のむずかしさ、などである。対象とした学生(児童教育専攻4年生)は、幼稚園実習の前に4週間の小学校教育実習を行なっているため、両方の体験から幼小の比較が可能だと考えられる。これらの項目の内容についてみると、小学校では、1年生から6年生(6才~12才)までの年齢範囲が広く、その指導方法も低学年と高学年では異なってくる。特に高学年を体験した学生は、その年齢の差によるとまどいも大きく、ことばが使いのむずかしさ、ことばかけのむずかしさをあげている。また、45分間を単位として行なわれていた指導が幼稚園では一日を単位としてその流れの中で子どもの様子をみながら臨機応変に対処していくむずかしさ、4才児と5才児の違い、発達段階に即した子どもの実態を把握しながら、ひとりひとりの個性を大事にしていくことのむずかしさがある。小学校では、知育中心であるが幼稚園では情意面が重視され、子どもの興味をひくための教材の選択、教科書というものがなく教師自身の工夫が必要となってくる。とりわけ遊びについては子どもと一緒に遊んで遊ぶことの大切さとその中でルールや安全性、健康状態などをみていくむずかしさ、さらに、一斉保育や自由保育の指導方法、私立幼稚園では宗教など、園独自の教育方針による指導のむずかしさ、課外活動(ピアノ、英語、水泳)などを含めた家庭環境、特に母親との関わりから生じる問題などである。そして、教師が子どもに接する態度はそのまま子どもに反映され、常に保育者としての認識と自覚をもち続ける大変さなどが主な内容である。すなわち幼稚園においては、子どものひとりひとりの活動が豊かに成長していくような指導が行なわれ、小学校では教育内容から子どもに知識や技能を与えていくといった指導が行なわれる。これらは、子どもの成長発達に基づく教育上の異いであるが、小学校側としても授業をただ知識を伝達する時間だけでなく、学習意欲、学び方、

年令	領域区分					区分数
3才児	健	社	自	音	書	6領域
4才児	康	会	然	語	製作	
5才児	康	会	然	語	製作	

図1 幼稚園(幼稚園教育要領)

領域区分	各教科						3領域
	国	社	算	理	音	図画工作	
	語	会	数	科	楽	家庭	
	道徳						
	特別活動						

図2 小学校1年(小学校学習指導要領)

そして幼稚園の望む自己実現、自己主張のできる時間としてとらえていく必要がある、幼稚園側もまた、小学校を学問を通しての自立の場としてとらえていくことにより、両者間のズレは少しでも狭められるのではないだろうか。

3. 教師の相互理解

われわれは、しばしば幼稚園教師が小学校教師を批判し、また小学校教師が幼稚園教師を批判するといった状況に出会う。すなわち、各教師のお互いの教育領域についての理解が非常に少ないのである。面接などを行なった教師の大部分は、業務の忙しさから相手側の幼稚園教育要領や小学校学習指導要領、指導書など読まれていない。小学校の教育課程に伴い、幼稚園においてもその内容の系統性など十分に理解し、指導がなされなければならない。お互いの教育効果をあげるためにも自分たちの教育課程の枠に滞りなく、相手の領域に目を向けることが必要とされる。幼小一貫教育を図るためには、まず子ども教育を担う者としての教師の相互理解ということが大事なことであり、両者間のズレが少しでも埋められるためには、①幼稚園教育と小学校教育の違いはどのようなことかということをはっきり認識しておくこと、②小学校学習指導要領と幼稚園教育要領から関連の必要性を把握すること、③指導内容ばかりにとらわれないで指導方法からも検討すること、④子どもの成長過程においてどのような時期にどのようなことを経験させることが望ましいか系統的に考えていく、といったことが教師に課せられるのではないと思われる。そして、そのためには、授業、保育参観などを通して、相手の立場や経験から意見の交流が行なわれることが望ましい。

V まとめと今後の課題

以上、幼稚園教育と小学校教育の関連について、現状と問題点などを検討してきた。今日、価値観の多様化、核家族化や母親の就労による家庭教育の低下、遊び場の消失、友人関係の崩壊などにより、従来家庭や地域の中でなされていた教育が学校教育に課せられている。幼小一貫教育を図るためには、現行制度において幼小の指導目的、内容、方法などが現在の社会要請や子どもの成長発達に対応できるものでなければならず、単にカリキュラム等の関連ではなく、子どもの生活全体が対象にならなくてはならない。そして、これらのことを実践においてどう実現していくかが大きな問題となり、今後、その

実践のための幼小関連研究が一層必要とされるだろう¹⁸⁾。

本研究を進めていくにあたって、その方法や考察に反省の余地が残る。とりわけアンケート調査では、幼小教育を観念的にとらえてしまい、具体的内容に触れることが少なかった。教師の一部の声として参考にはなったが、これだけで実態とはいえず、今後調査範囲を広げ、現場での問題点を検討していきたい。そして、幼稚園実習と小学校実習に携わる者の一人として、これらの研究を役立てていきたいと思う。

本研究は、昭和57年度本学特別研究費より行なったものです。ここに感謝を表します。

また、研究を進めていくにあたっていろいろ御指示下さった児童学科長、保育科長に心から御礼を申し上げます。さらに、各方面から御支援下さった児童・保育科の先生方に感謝を表し、ここに付記いたします。

註

- 1) 東京女子師範学校附属幼稚園園則 第一条
- 2) 東京都私立幼稚園協会編：「幼稚園参考書—その教育と運営—」p. 316 1975, フレーベル館
- 3) 幼稚園保育及設備規定 第一条
- 4) 同 上 第三条
- 5) 幼稚園令 第一条
- 6) 東京都私立幼稚園協会編：「幼稚園参考書—その教育と運営—」p. 317 1975, フレーベル館
- 7) 学校教育法 第七十七条
- 8) 学校教育法 第七十八条
- 9) 学校教育法 第十七条
- 10) 学校教育法 第十八条
- 11) 児童福祉法 第三十九条
- 12) 厚生省、文部省「幼稚園と保育所との関係, 1963
- 13) 文部省「学校基本調査速報. 1972
- 14) 文部省「全国学校総覧」, 1982, 原書房
- 15) 文部省幼稚園教育要領
- 16) 同 上
- 17) 文部省小学校学習指導
- 18) 本研究の一部は、日本保育学会第36回大会で発表された。

参考文献

- 1) 文長省初等教育課編：「特集幼稚園教育と小学校教育」，初等教育資料 No. 375，1971，東注館出版
- 2) 文部省小学校教育課，幼稚園教育課編：「特集幼小の連携」，初等教育資料 No. 274，1979，東注館出版
- 3) 文部省小学校教育課，幼稚園教育課編：「特集幼児児童期の指導の関連」，初等教育資料 No. 401，1980，東注館出版
- 4) 「特集幼児教育」児童心理 No. 375，1977，金子書房
- 5) 「特集就学前教育」，児童心理 No. 415，1980，金子書房
- 6) 広瀬久「幼小関連講座第1回～第12回」幼児と保育，1982
- 7) 山内昭道「幼児期における教育内容及指導方法について，小学校教育との連携を中心として」横浜市教育センター委託研究報告書
- 8) 仲新他「学校の歴史第二巻小学校の歴史」，1979，第一法規